

富士山世界文化遺産登録 10 周年を迎えた富士山のふもと 山梨県 富士吉田市

テキスタイルの街 富士吉田市で開催される

布をテーマにした国内唯一の芸術祭「FUJI TEXTILE WEEK 2023」

3 回目の今年は 11 組の国内外のアーティストが参加

*都合によりアーティストの参加組が変更になりました

2023 年 11 月 23 日（木・祝）-12 月 17 日（日）開催



ネリー・アガシ, 参考作品 | From the exhibition "No Limestone, No Marble" "The Quiet Before the Storm" 2022
Photo by Clare Britt Sound: Ryan Packard

今年で 3 回目を迎える、伝統織物産業と現代アートが織りなす国内唯一の布の芸術祭『FUJI TEXTILE WEEK 2023 (フジテキスタイルウィーク)』は「アート展」と「デザイン展」で構成され、今年のテーマは<BACK TO THREAD / 糸への回帰>です。「アート展」では、国内外 11 組（都合により参加アーティスト数が変更）のアーティストがテキスタイルをテーマに、織物の産地として 1000 年の歴史を持つ富士吉田の旧糸屋や工場跡地を舞台に作品を展示します。南條史生を総合ディレクターに、キュレーターにアリエ・ロゼン、丹原健翔らも加わり、海外の美術館やアートフェアに出展する国際的なアーティストから今後の活躍が期待される若手まで、多彩なアーティストが参加します。織物産地の歴史、物語をリサーチし、機屋との対話を重ねながらテキスタイルから発想される多様な表現が展開されます。

「デザイン展」では、伝統的な織物である甲斐絹（かいぎ）を様々な視点から読み解きます。現在地域内で保管されている数百点を超える資料の中から厳選された生地や羽織、当時使われていた道具を様々な視点からご覧いただくアーカイブ展示をはじめ、新たな創造の契機を目指し、ビジネスマッチングプログラムや様々なイベントを開催します。

また今年も、富士山の世界文化遺産登録 10 周年を迎えたことから、「富士山借景」を企画し、富士山ビュースポットを特別開放する「FUJI SKY ROOF(フジスカイルーフ)」やフォトコンテスト、またアーティスト達が参加するトークイベントなど、より多角的に楽しめるイベントを実施します。

「アート展」のポイント

▼世界の6の地域と国内から11組のアーティストが参加

世界6の地域と国内から11組の現代アーティストが参加します。彫刻、写真、刺繍作家、パフォーマーら多岐にわたる表現形態で、代表作から FUJI TEXTILE WEEK のために制作した新作まで多角的な視点でテキスタイルにアプローチします。

参加アーティスト：

ネリー・アガシ、池田杏莉、沖潤子、清川あさみ、スタジオ ゲオメトル、顧剣亨、筒 |tsu-tsu、津野青嵐、PACIFICA COLLECTIVES、ユ・ソラ、ジャファ・ラム (50音順)

▼テキスタイルの街で制作されるサイトスペシフィックな新作インスタレーション

これまで、旧糸屋や喫茶店など空き家を展示会場に取り入れてきましたが、今年のはかつての機織機の工場跡地、旧山叶（やまかの）がメイン会場に加まりました。地上約9m、幅約20mの工場跡地では、シカゴを拠点に活動するネリー・アガシが、現地でのリサーチを重ね、山梨県産業技術センターの技術提供を受け制作した生地を使用し、ダイナミックな大作を発表します。一方、顧剣亨（こ・けんりょう）は、旧山叶の事務所で、複数の写真データをピクセルごとに編み込む独自の手法で、傷などの都合により一般に流通しないB反に富士吉田の異なる時代の地図を織り込んだインスタレーションを発表します。

▼テキスタイルによる多様な表現で織物産地を再考する

清川あさみの作品は、写真や雑誌、本や布に刺繍を施す独自の手法で、ソーシャルメディアなど大量の情報が氾濫する現代社会で、個人のアイデンティティの内と外の間を生じる差異や矛盾に焦点を当て可視化します。また捨てられた傘など廃材を使った作品づくりで知られる香港のアーティスト、ジャファ・ラムが制作する、B反を使用した雲のような新作は、鑑賞者に見ることを問いかけます。展示ではアーティスト独自の着眼点で、テキスタイルによる多様な表現の作品を発表します。

▼地域との交流から制作される作品群

地元の方から古着や思い出の品を提供いただき、インスタレーション作品を制作するのは「喪失」と「還り」をテーマに作品を制作する池田杏莉。人との繋がりが失われ、捨てられようとする道具たちに焦点を当てます。また地元山梨を拠点に活動するドキュメンタリーアクター筒は、戦後に富士吉田市の繊維産業を牽引した織り手を演じるドキュメンタリーアクティング作品を発表します。これは実在の人物取材し、演じる表現方法で、地域の人たちから話を聞く中で、繊維産業の地で長年繰り返されてきた物語を演じます。また付随して、現地に住む人々から直接聞いたオーラルヒストリー（地域の歴史、物語）を筒が演じ直す音声作品も発表します。参加者はガチャガチャで音声キットを購入すると、通常は見落としてしまう各会場への道中が、さまざまな個人史を聞きながら歩く、オーディオ・パフォーマンス体験となります。

アート展


 ネリー・アガシ
 《mountain wishes come true》

技術協力：山梨県産業技術センター
 制作協力：榎田商店
 参考作品 | From the exhibition "No Limestone, No Marble" "The Quiet Before the Storm" 2022
 Photo by Clare Britt
 Sound: Ryan Packard

シカゴを拠点とし、多領域を横断して活動するアーティスト、ネリー・アガシは、この度日本では初となる大規模インスタレーションを旧山叶（やまかの）で発表する。旧山叶は、長年に渡り、富士吉田の織物産業を支えてきた存在だったが、現在はその店舗と倉庫は整理され空いている。市内にはその他にも行く末が決まっていない空き店舗や建屋があり、旧山叶もそのうちのひとつだ。

「mountain wishes come true - 山の願いは叶う」（旧社名・建物の直訳）は、アガシと旧山叶、その周辺地域との対話を公開する場となる。アガシは伝統と革新の架け橋となり、独自の芸術的ビジョンと地元の特性を巧みに融合させている。また時間、記憶、拾い物、想像力といった物理的かつ形而上学的な要素を用いて、空間の歴史、これまでの変遷、そして無限の可能性を秘めた未来に触れようとしている。

この展示では新たに空っぽとなった建造物で、現在取り組んでいる作品や実践、そして、彼女と非常に親しい人たち（10歳の息子ヨナや、長年のサウンド・コラボレーターであるライアン・パッカードなど）や、ここ数ヶ月の間に出会った人たちとのコラボレーションを多数紹介する。



清川あさみ 《わたしたちのおはなし》

参考作品 | Serendipity, 2023

古びた3階建ての日本式の蔵があり、その2階と3階に作品が展示してある。周囲は板敷きの床と壁である。素っ気なく、また木造建築の温かみを感じられる。この特異な空間に清川は8点の作品を展示している。2階には数点の本をベースにした作品がイーゼルに置かれている。本は入念に刺繍され、その糸は本のページの外へとあふれ出ている。楽譜をベースにした作品「別れの歌」

は、楽譜の上に刺繍を構造的に配置したもので、リズムを感じさせる構成主義的なデザインとなっている。その中の一点は、本展のために作られたもので、木花之佐久夜毘売（このはなのさくやびめ）の神話からとられたものだ。3階に上がると大きな作品 Serendipity シリーズの新作がある。重厚なマチエールを持ち、絵画的である。刺繍という技術は糸の技術である。絵画に糸という素材を持ち込むことは、絵画を彫刻にすることだ。清川は2次元と3次元の間を往還しつつ、そこに絵画、音楽、文学のポエジーを生み出している。

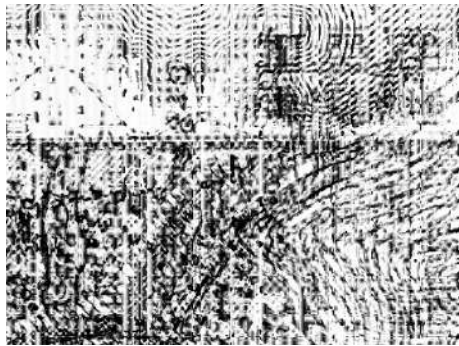


ジャファ・ラム 《あなたの山を探して》

テントか傘のようなインスタレーション作品は、観客の視覚を切り取り、風景を変える動きを持っている。古い工場の跡地に立つ廃屋の屋上に設置されたこの作品から富士山のある風景を眺めると、富士山は特殊なアングルと異質な切り取り方で、普段とは違って見えるだろう。それは今まで見てきたものを再度見直すこと、新鮮な目で見直すこと、新たな視点で見直すことを促している。アートとは、見る視点の特異性のことなのだ。この作品に使われた布は、富士吉田の機屋から収集した、B反と呼ばれる傷などの都合により一般に流通しない布で出来ている。そうした生地を使うことは持続可能性に対する真摯な回答でもある。元々香港で発表された初期には、雨傘の廃品からとられた布を使っていた。そこで、この作品の系譜はずっと環境問題がテーマだったことがわかるだろう。ジャファは現在、ヨーロッパでも侘び寂びのセンスを持つアクセル・ヴェールヴォート・ギャラリーに所属し、2024年にはオランダでも作品を発表する予定である。

Sponsor : Nelson Leon

参考作品 | ©Axel Verwoerd Gallery and Artist



顧剣亨 《Map Sampling_Fujiyoshida》

顧剣亨は「デジタルウィービング」という、複数のデジタル写真を手作業で一つひとつのピクセルごとに「編み込む」独自の手法によって、複数のイメージが重なり合う写真作品を表現する。先染め生地を織り込む時に複数の糸が重なり合って現れる錯覚から着想した本作では、富士吉田市の様々な時代の地図を「デジタルウィービング」を用いて編み込ませ、二枚の透け感のある生地にプリントすることで、新たに立体感のあるイメージを浮かび上がらせる。

その時その場所の意義や史的役割を示してくれる地図という時空間の断面の中には、「生きた歴史」が宿っていると顧は言う。現地リサーチを経て作られた本作では、富士山信仰や、織物業の衰退と発展の推移とともに変わっていった富士吉田市の「生きた歴史」が、二枚の生地の重なり合いの中で錯覚として召喚される。プラットフォーム上から俯瞰する我々の視点の動きに合わせて見え隠れし、時にうねるように遷ろう地図たちの新たな表情は、たしかに「生きている」と形容すべきなのかもしれないし、あるいは亡霊的とも言えるだろう。

協力 : Yumiko Chiba Associates



池田杏莉 《それぞれのかたりて / 在り続けることへ》

何十万枚もの薄い皮膚のようなものが、何重にも丁寧に、使い古された家具や衣類たちの表面にレイヤーされている彫刻作品たち。機織り機など大型機械を生産していた旧山叶で実際に使われていた家具やユニフォーム、そして池田が富士吉田市でリサーチの中で会った人たちの古着や私物が繭のように覆われている。表面を形作る薄い“皮膚”たちは、富士吉田に住む、テキスタイル産業をこれまで支えてきた人たちの手足をシリコンで型取りして一枚一枚作られている。それはいわば誰かの手垢のようで、ゆっくりとモノや空間の表面に積雪され、数多の職人や従業員ががっついてはこの工場跡を行き来していた歴史を示唆する。

池田は喪失の痕跡を、モノや空間の中から浮かび上がらせることで、それぞれの“かたりて”の物語の収束点を作るといふ。床に敷かれた黒い落ち葉のような皮膚たちを踏み割りながら工場跡の残り香に「耳をすませる」我々にとって、それは畏怖として映るかもしれない。ただ、時に芸術はそういった静かな向き合いを見届けるところに、意義があると考えている。

Photo by Anri Ikeda



パシフィカ コレクティブス 《Small Factory》

PACIFICA COLLECTIVES は名前どおり、コレクティブのように国内外のアーティストとコラボレーションしてインテリア雑貨を制作するブランドである。糸の手染めから制作までの縦通職人たちとネットワークをもち、人柄の相性などを考えながら作家を選定する。実にコレクティブ的であるその丁寧なプロセスもあって、現代のサブカルチャーとの接続も多く、製造・販売を超えてシーンを牽引する一躍を担っている。旧絹屋街の糸屋だった会場では、何色もの手染めの糸巻が制作途中のアートラグに刺さった状態で展示されている。現代美術と伝統技術のコレクティブ（=集合）として、我々の日常と芸術の交点となる場を生み出すこと。時には何十色もの糸を集合させて作家の思い描く画を表現する PACIFICA COLLECTIVES の制作と活動には奇しくも比喩的な類似性を感じる。SARUYA HOSTEL では、ポップアップを兼ねたインスタレーションが展示されている。旧糸屋での展示と併せると、お店の装いもまた芸術実践の延長線上にあることがわかる。プロセス自体がカルチャーを“編み出す”PACIFICA COLLECTIVES のその様子を、富士山麓の織物産地文化の成り立ちと重ねて見ることができるのは、本芸術祭にとって大変有意義である。



沖潤子 《anthology》

沖はラグのような布に刺繍を施す。刺繍の描き出すイメージは、比較的単純な円形あるいは、楕円形のものが多い。その大きな図柄から周辺に多数の糸が伸びている。地となる布は、洗濯物のように上から垂れ下がり、あるいはパッチワークした旗のように四角い形で壁に展示される。さらに平面から逸脱し、白い石に針を刺したような作品や、かごの中に入れられたクッションの様な物体、さらに箱に入った人間の身体の一部のような不定形の作品もある。いずれの場合にも糸が縫い付けられ、重ねられ、彫刻を覆い、織物のような表情も見せている。作品のあるものは女性器の隠喩にも見えるが、一方で古びた工芸品や古布のように干からびた味わいがある。その点を敷衍して言えば、ここに見られる美学は詫び寂びに通じるものなのかもしれない。いずれにしろ、抽象的でフェティッシュな作品群は、糸という素材を絡めながら、不可解な魅力を持って存在している。作者は刺繍の枠を超えて、その領域を拡張しつつある。

協力：KOSAKU KANECHIKA

作品イメージ | © Junko Oki, Photo by Yasushi Ichikawa



筒 | tsu-tsu

《unsound dresser : 化粧箱、鳴ラナイ》

筒はドキュメンタリーアクティングという手法を、パフォーマンスの形式としている。それは現実の人物や事件を取材し、演じる一連の行為からなっている。筒という感覚は幼少時より習っていた日本舞踊から得た「筒（つつ）」という身体感覚についての名称からきているという。それは役を演じるときに筒の状態を経由して、役柄に転身することを表している。今回の作品では富士吉田市に昔から伝わる富士山と金色姫と織物の伝説にテーマを取ったパフォーマンスを演じる予定である。その舞台として、筒は映像やインスタレーションなど一つの環境を作り出し、それをを用いて演技を提示する。また付随して街に生きる人の語りを基に、音声ガイド型のオーディオ・パフォーマンス作品も制作する。鑑賞者が街を歩く事を通して、そこに堆積した記憶と出会う機会をつくることに挑戦している。

*パフォーマンス：毎週金土日の 13:00-、14:00-、15:00-
11/23(木・祝)は実施

*オーディオ設置場所：下吉田駅・旧山叶、料金：1000 円

セノグラフィ：板倉勇人 サウンドエンジニア：安齋勸
制作補助：木下真紀 助成：公益財団法人クマ財団
協力：6okken



ユ・ソラ 《日々》

ユ・ソラの扱う素材は布と糸である。比喩的に言えば、布地は基本的に展示空間内部の事物の表面の皮膚を形成する。それらの皮膚を形にするのは、皮膚を継ぎ合わせる黒い糸の働きである。この役割分担は、服や着物を作るときも同じだろう。しかしユはそれを衣服ではなく一つの部屋のインテリアまで拡張する。彼女が作る全ての製作物の色合いは布の白である。その空間の中には誰でも見たことのあるような生活の雑貨や家具が並んでいるが、全てが白いためにそれは夢の中か、あるいは平行世界のメタバースのような不思議な空気が漂っている。それは過去の思い出かもしれない。何れにしろ「2001年宇宙の旅」の最後のシーンのような無機質な質感とは違って、そこはかたなく暖かく、懐かしい空間に思える。糸はその思い出をつなぎ合わせる魔法かもしれない。白によるある種のミニマルな空気と、潔癖な清潔感が独特の世界を作り出す。空間全体を作品とする大型のインスタレーションであり、また観客が体感することができる没入型の作品ということも出来る。黒い糸は世界を一つにまとめる洞察の隠喩かもしれない。

作品イメージ | 「日々を重ね、」Mixed media_installation_2022



津野青嵐 《ねんねんさいさい》

幼少期の津野にファッションへの道を示した祖母が臥床生活になったことから制作した本作は、祖母のために”オーダーメイド”した衣服である。祖母が長年集めてきた布と3Dペンで作られた衣服には、肌に触れる部分に柔らかい布を利用し、介護ベッド上でも着られるようにするなど、祖母と共に身体の変化に向き合ったことがわかる。本作のタイトルは、祖母がよく口にする「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」（意訳：毎年、花は同じように咲くが、人の変化は同じではない）という言葉からくる。牡丹の花をモチーフにした本作は津野と祖母の家族愛を体現し、また自宅介護の中で見え隠れする生死の輪郭を示すようでもある。

津野は作家活動と並行して精神科の看護師として当事者研究という、日常の様々な体験や困りごとを”研究テーマ”として扱い、自身がそのテーマについて仲間と共に研究する自助的な活動の現場に触れてきた。現在大学で衣服と「ファット」な身体の関係性を研究する津野にとって、研究とは自身と向き合うことを意味する。展示されるドローイングたちからも読み取れるように、本作は津野と祖母に共通する「ファット」な身体との向き合い方を扱う、いわば自身の「当事者研究」の結果の一つでもある。それは単なる精神科学的な取り組みより、もっと個人史的で、慎重な所作である。



スタジオ ゲオメトル 《Changes of the Mountain》

機織機などを扱っていた旧山叶の建物とその倉庫を結ぶ回廊部分に設置されているのは、チェコ共和国のアーティストユニット、スタジオ ゲオメトルによるタペストリーである。表面に浮かび上がるドローイングは、機に経糸を張った状態で描かれたもので、そこに緯糸を織り込んで一つの世界観を作っている。20世紀初頭の手織り織機や、19世紀末から続く織物工場の工業用織機を用い、チェコのテキスタイルの歴史を踏まえているが、糸の上で踊るフリーストロークのみずみずしい抽象表現は、テキスタイルとは思えない自由な表現を示しており、そのため現代美術の文脈でも展示の機会を得ている。これらは自然豊かなチェコでの制作環境に加え、インドネシアや日本等での滞在経験がインスピレーションの源泉となり、内的、外的な心象風景を表出している。伝統と革新、固有の文化と国際性、二人のアーティストの個性が、豊かな色彩をもって幾何学的（ジオメトリック）に織り上げられた作品である。

協力：チェコセンター東京
 作品イメージ | Photo by Gabriel Urbanek

デザイン展「^{か い き}甲斐絹をよむ」 会場 | (FUJIHIMURO)

デザイン展では産地で100年前に織られていた幻の織物「甲斐絹」を多角的な視点で解き明かし、再発見する展示会を開催します。織物を構成する「textile」は、ラテン語の「texere」から派生しており、これは「織る」または「組織する」という意味があります。テキスタイルは、糸や繊維が織り合わさって形成されますが、それだけでなく、文化的、歴史的な意味やメッセージも内包しています。このようなテキスタイルから得られる情報は、言葉や文脈と同様に、現代の人々にもその当時の思い、時代背景、歴史、人々の営みを伝える力があります。現代では「甲斐絹（かいき）」を作る技術も、その意味やメッセージを理解する知識も失われていますが、展示では4つのキーワードで、失われた「甲斐絹」に再び光を当て「甲斐絹」が持つ未解明の美と深みに迫るとともに、新しい解釈と理解が生まれることを目指します。

●甲斐絹をよむ



なぜこの地域で織物産地が形成されたのか？現在、この地域が織物産地としてどのような特徴を持ち、その技術はどこから来たのか？過去から現代に至るまで、この地域の織物産業について甲斐絹を中心によみ解く展示です。

●意味をよむ



甲斐絹は羽織の裏地として用いられてきました。時として、表地よりも高級で手の込んだ甲斐絹をなぜ裏地として使ったのか。日本人が持つ裏勝りの文化を背景に、甲斐絹に描かれた絵やデザインをよみ解く試みです。

●技をよむ



失われた技術、ロストテクノロジーとなってしまった甲斐絹。その高度な技術はどのような道具や素材、そしてどのような人々によって築き上げられたのか。これらの要素を組み合わせ、よみ解きます。

●物語をよむ



読み手（表現者）

写真家 川谷光平氏

詩人 水沢なお氏

甲斐絹がなぜ裏地に用いられるのか、その背後には何があるのか。見える見えないの甲斐絹には人々の駆け引きやストーリーがあります。今回は3名の“読み手”の視点から甲斐絹に潜む物語を想像していきます。

FUJI TEXTILE WEEK のもうひとつの魅力 富士吉田で今を飾る建物と風景

<織物産地の歴史がつまった展示会場>

富士吉田には街のいたるところに織物産地の歴史と物語が詰まった建物があります。FUJI TEXTILE WEEKでは、使われなくなった織物関連の工場や倉庫、店舗などを展示会場として再利用することで、産業の記憶の保存と街のアイデンティティ形成に取り組んでいます。

●展示会場風景 2023年 新たに展示会場となった旧山叶（やまかの）



2023年の総合案内所および、アート展示会場として再生した旧山叶の建物。鉄鋼一次製品卸売業（織機の部品などを扱う会社）を扱う会社だった。



旧山叶の社屋となりの工場跡地。2023年は地上約9m、幅約20mの広大なスペースで、ネリー・アガシ氏によるテキスタイルを用いた巨大な作品が展示される。

●展示会場風景 2022年 かつて糸屋だった建物を再生



FUJI TEXTILE WEEK 2022では、かつて糸屋だった建物を再生しアート展の会場にした。撮影：吉田周平



FUJI TEXTILE WEEK2022 旧糸屋での展示風景《頑健な情報帯》 村山悟郎 撮影：吉田周平

<織物産業と共に栄えた飲み屋街「西裏」>



会場となる富士吉田市の中心市街地、下吉田は機屋と商人、そして飲み屋を営む人々の街でした。街の真ん中を走る「本町通り」と、その両脇を走る「東裏通り」「西裏通り」。この3つの通りを中心に人々の暮らしが営まれていました。織物産業が栄えた時代、東裏からは機織りの音が、西裏からは酔っ払った人々の笑い声や芸者の三味線の音色が聞こえてきました。現在の西裏 新世界乾杯通りは、一度は衰退し廃墟街となりましたが、近年地域の人と移住者たちが力を合わせ再生中で新店舗が次々とオープンしています。FUJI TEXTILE WEEKでは、西裏の地域も会場として様々なコンテンツを配置し、織物産業を通して発展した街全体の物語を来場者に伝えます。期間中には台湾のクリエイターとのコラボ企画を同時開催予定です。

今年はトークイベント、参加型のイベント、子どもも楽しめる企画も充実しています

アーティスト・トーク *この他にも開催予定です。参加方法とあわせて詳細は公式ウェブサイトに掲載します。

1. アーティスト×キュレータートーク | 11月23日 ●11時～ 会場：FabCafe Fuji
南條史生 × ジャファ・ラム
2. アーティスト×キュレータートーク | 11月23日 ●13時～ 会場：FabCafe Fuji
南條史生 × アリエ・ロゼン × ネリー・アガシ

「FUJI TEXTILE WEEK 2023 フォトコンテスト」

会期中限定で開放される、富士山絶景スポット「FUJI SKY ROOF」から写真撮影をして応募しましょう！

本年、富士山世界文化遺産登録10周年を迎えたことを記念して、富士山ビュースポットの特別開放企画「FUJI SKY ROOF(フジスカイルーフ)」を初開催します。FUJI TEXTILE WEEK 会期中は、普段開放していない建物の屋上など、普段観ることのない富士山絶景スポットでの撮影が可能となります。

応募作品の中から厳正な選考を行い、入賞された方には、富士山のふもと富士吉田市を存分にお楽しみいただける宿の宿泊券や、1000年以上続く織物の産地 富士吉田のテキスタイルブランドの人気製品、昭和の香りが残るレトロな雰囲気のディープスポット「西裏地域」をはしごする飲食券などをプレゼントします。



- 写真テーマ： 「富士山借景」 または 「富士吉田の街並み」
- 応募期間：
 - ・第1期 2023年9月18日(月・祝)～11月6日(月)
 - ・第2期 2023年11月7日(火)～12月17日(日)
- 応募方法：
 - お一人さま何作品でもご応募いただけます
 - ① Instagramで「@fujitextileweek」と「@city_fujiyoshida」の両方をフォロー
 - ② 富士吉田市内から、「富士山借景」または「富士吉田の街並み」をテーマにした写真を撮影
 - ③ キャプション部分に「#fujitextileweek」または「#フジテキスタイルウィーク」と第1期応募「#ftw2023photo01」、第2期応募「#ftw2023photo02」をつけて投稿
- 入選者プレゼント
 - ・グランプリ(各期1名様、計2名様)
 - ・準グランプリ(各期1名様、計2名様)
 - ・西裏賞(各期5名様、計10名様)、他
- 選考方法： 応募作品の中から厳正に審査し、受賞者を選出します。
- 結果発表： FUJI TEXTILE WEEK 公式 Instagram および公式ホームページにて発表を行います。
- 問い合わせ： FUJI TEXTILE WEEK2023 フォトコンテスト事務局(富士吉田市役所富士山課)
Email: fujisan@city.fujiyoshida.lg.jp
- 詳細： 公式ホームページに記載しています

FUJI TEXTILE WEEK 2023 開催概要

- 名称： FUJI TEXTILE WEEK 2023 (フジテキスタイルウィーク 2023)
 - テーマ： BACK TO THREAD / 糸への回帰
 - 会期： 2023年11月23日(木・祝) - 12月17日(日)
 - 休み： 期間中の月曜日(11月27日、12月4日、12月11日)
 - 時間： 10:00 - 16:00 (各会場への入場は15:30まで)
 - 会場： 山梨県富士吉田市下吉田本町通り周辺地域
 - アクセス：
 - ・東京方面より
 - <車でお越しの方>中央道富士吉田西桂スマートICより会場周辺まで約10分
 - <公共交通機関でお越しの方>富士急行線下吉田駅降車 徒歩5分もしくは月江寺駅降車 徒歩5分
バス新宿から高速バスにて約1時間半→富士山駅にて降車 徒歩15分
 - ・名古屋方面より
 - <車でお越しの方>東富士五湖道路富士吉田忍野スマートICより会場周辺まで約10分
 - <公共交通機関でお越しの方>名鉄バスセンターから高速バスにて約4時間半→富士山駅にて降車徒歩15分
 - 料金： 一般 1,200円(税込)
 - *「アート展」「デザイン展」「FUJI SKY ROOF」に入場いただけます
 - *一部、無料で参加・観覧いただけるイベントや会場がございます
 - *高校生以下及び18歳未満、65歳以上、心身に障害のある方及び付添者1名は無料
(総合案内所にて学生証または年齢の確認できるもの、障害者手帳をご提示ください)
 - 購入方法(オンライン)：
 - Peatix <https://fujitextileweek2023.peatix.com/>
 - Artsticker <https://artsticker.page.link/FTW2023>
 - 現地購入先(会期中のみ)：
 - FUJI TEXTILE WEEK 総合案内所(山梨県富士吉田市下吉田2丁目16-19)
 - FUJI TEXTILE WEEK 下吉田駅案内所(〒403-0011 山梨県富士吉田市新町2丁目8-12)
 - 公式WEB/SNS：
 - ホームページ：<https://fujitextileweek.com>
 - Instagram：[@fujitextileweek](https://www.instagram.com/fujitextileweek)
 - Facebook：<https://www.facebook.com/fujitextileweek>
 - X：[@FUJITEXTILEWEEK](https://twitter.com/FUJITEXTILEWEEK)
 - 公式ハッシュタグ：[#fujitextileweek](https://twitter.com/hashtag/fujitextileweek) #フジテキスタイルウィーク #布の芸術祭
 - 主催： 山梨県富士吉田市
 - 企画運営： FUJI TEXTILE WEEK 実行委員会
 - 助成： オランダ王国大使館 / 山梨県
 - 協賛： エヌ・アンド・エー株式会社 / FSX株式会社 / FSX富士株式会社 / FabCafe LLP / 株式会社ロフトワーク
 - 協力： 株式会社宗邦 / チェコセンター 東京 / ハイランドリゾート株式会社 / 富士山麓電気鉄道株式会社 / 富士吉田織物協同組合 / 一般財団法人 ふじよしだ観光振興サービス / 富士吉田市商業連合会 / 富士吉田商工会議所 / 株式会社ふじよしだまちづくり公社 / 山叶株式会社
- *協賛、協力いずれも五十音順

お問い合わせ先

FUJI TEXTILE WEEK PR 担当(サニーサイドアップ内)

小坪(080-4112-1337)、小池(080-7024-5953) Email: fujiyoshida@ssu.co.jp

※広報用画像は下記よりダウンロードいただけます

<https://tinyurl.com/2ye3pktt>